

私が生まれ育ち、現在も住んでいる世田谷区祖師谷は、昭和30年代までは緑豊かな農村地域でした。スイカやメロンなどの園芸作物を作る畑が広がり、薪炭を取るための雑木林があちこちにありました。子どもの頃、母の実家があつた多摩村の丘陵へもよく昆虫採集に出かけましたが、間伐や下草刈りが施されたナラなどの雑木林に、キンラン、ギンラン、カタクリなどの野草がたくさん生育していました。

中学では生物部に所属し、昆虫や花を求めて高尾山や陣場山方面まで歩き回るようになりました。5年（現在の高校2年）の時に兄から中古のカメラをもらったのが写真を撮り始めたきっかけで、当時は家の周りの里山の風景を撮影していました。本格的に山岳へ入るようになったのは、東京教育大学（現在の筑波大学）農学部で進み、長野県の野辺山で農場実習を行なつた時に南八ヶ岳へ登り、山の風

景や植物・動物に接したことからです。

大学卒業後、母校である世田谷学園で教鞭を取ることになり、生徒たちの山行を指導することになりました。よく出かけた場所の1つは長野県の蓼科高原です。ここでは、山肌に木が生えている部分と生えていない部分が縞になつて見える「縞枯現象」や、スキー場開発に伴う森林の伐採後に生成した草原など、ダイナミックな植

木林を活用し、自然と調和しながら里山を作り上げてきました。今では昔ながらの里山も少なくなりましたが、できるだけ実際に森林へ入つて、人間の手が入つた自然の豊かさを体感してほしいと思います。現在は森林の活用で採算が合うのはキノコ栽培が主になっていますが、輸入材ではなく、日本の気候に合つた国産材がもつと使われるようになり、森林を管理

緑のエッセイ



昭和6年7月20日生まれ 79歳。
平成10年まで世田谷学園中学校・高等学校教諭
駒澤大学講師。
旧制中学時代から写真を撮り始め、昭和63年から全日本山岳写真協会会員。平成4年富士ファイルム賞、平成9年文部大臣奨励賞受賞。

生を生徒たちと共に観察し、森林を始めとする自然と人間の関わりについての興味や関心を育ててきました。

しようとするモチベーションが高まる



エノキに自生したキウラゲ（撮影：田中 清）